

学校だより 第203号(4-8)

け や き

櫻



令和4年12月1日

横浜市立永田中学校  
横浜市南区永田みなみ台7-1  
TEL045-715-5511

## 『あの日あの時あの瞬間!』のこと

校長 永山 泰士

日暮れが早くなり、冬が近づいてきました。生徒たちの最終下校時刻の頃にはもう真っ暗です。生徒たちの「行ってきます」から「ただいま」までの時空間を、学校は「安全安心」に過ごせるようにしっかりと守っていかねばならないと思っています。

さて、先日、新聞のコラム、鷺田清一氏の「折々のことば」に次のことばを見つけました。「過去は新しく、未来はなつかしいものなのかもしれませんね。」これは理論物理学者の佐治晴夫氏の随想集「この星で生きる理由」からのものだそうです。それによると『これから』が『これまで』を決めるのだと。だから無闇やたらと過去にこだわるのではなく、『これから』を見つめ一歩踏み出そうと。私はこの「ことば」にふれて、この季節になると蘇ってくる『あの日』のことが思い出されるのでした。今回はそのことをお伝えします。

東京の私鉄に揺られて学校に通っていた少年の頃のことです。朝、いつも同じ時刻発の電車の同じ車両に乗ることが私にとっての「ルーティン」でした。ある時、途中駅からその同じ電車に乗ってくる、一人の少女に気づきました。その少女はいつもドアのところに立ち、ドアの窓から外の景色を眺めていました。私はその少女よりも早く電車を降りていたのに、その少女の乗る駅は知っていましたが、降りる駅はわかりませんでした。あの頃の電車内の様子は今とは違って、ラジオを聴く人が片方の耳だけにイヤホンを入れていたり、新聞や本を読んだりする人がいる、そんな時代でした。私は読書することもなく、ただ電車で揺られているだけの日常でしたが、その少女を見かけてから、その少女のことが気になるようになっていきました。その少女はいつも一人でした。「なぜ、いつも一人なんだろう?」「友だちがいないのかな?」。私は思い切って、その少女に声をかけてみようと思うようになりました。しかし、なかなか実行できません。思いを行動にすることには勇気がいります。私は迷いもあり、勇気もないまま、日にちだけが過ぎていきました。そうしているうちに、その少女はいつもの電車に乗ってこなくなりました。私は後悔しました。何度も何度もチャンスはあったのに、声をかけられなかった自分自身が情けなくなりました。一度、決めたことを実行できなかったことが悔しくて、次にその少女を見かけた時には、絶対に声をかけようと再度決心したのでした。

それから2か月くらい経った冬の昼下がり、試験で学校が早く終わった私は帰りの電車で、偶然にその少女と同じ車両に乗り合わせたのです。私の心臓は飛び出すくらいドキドキしました。覚悟を決めて、さあ、いよいよ声をかけようと近づいていったその時です。その少女は友だちと楽しそうにコミュニケーションをとっていたのです。手話でした。その友だちも手話でした。その少女は私をじっと見つめました。私は…。私は何も言えませんでした。その少女はやがて一人で電車を降りていきました。もうそれきり、その少女を見かけることはありませんでした。私はその少女に自分の心のなかをその透き通るような目で見透かされたような気持ちになりました。私は自問しました。自分はなぜ『あの日あの時あの瞬間』に声を発することをやめてしまったのだろうか。もう50年が経ちました。あれ以来、冬になるといつも、時がタイムスリップして、あの時に戻ることができるならば…と思います。

毎年12月になると、人権を考える取組が永田中学校でも始まります。「だれもが安心して豊かに生活できる」、そんな世の中になってもらいたいと思うと同時に、私たち皆でそのような社会(学校)を創り上げていかなければならないと思います。私たちの日々の暮らしのなかで、心を研ぎ澄ませて、「気づいていく」ことが大切です。自分も大切です。相手も大切です。みんな大切です。今年も、生徒による「全校人権標語づくり」が行われ、一人ひとりの生徒の作品(思い)が集められます。一人ひとりの生徒の思いが学校や地域や社会を変えていきます。今年も心に染み入る「人権標語」が楽しみです。そして、「豊かな感性と人権感覚が研ぎ澄まされた永田中生徒」というのも永田中学校の大切な伝統として受け継がれてほしいものです。